

麻酔科クラークシップ (the University Medical Center Groningen)

学習成果に関するレポート

医学科 5 回生 K.S (Male)

<目的>

麻酔科の学習。

Formal であるといわれる日本の医療現場との違いを見学するため。

度胸をつけるため。

<スケジュール>

麻酔科の先生は朝 7 時 30 分からカンファレンス室でカンファレンスを行っていました。

しかし日本人である私にオランダ語が理解できるはずもなく、supervisor の先生に「オランダ語わからないだろうし参加しても意味ないから来なくていいよ。手術室集合ね」とのことを言われ、一度も参加していません。どうやら朝のカンファレンスではコーヒーが自由に飲めるらしいことだけわかりました。

7:50 頃 休憩室でコーヒーを飲んでから手術室へ

→16:00 頃までに数件の手術を見学。

→次の日の症例をチェック。シートはすべてオランダ語なので、次の日に担当して下さる先生と問題点などの勉強。

→帰宅

という毎日を過ごしました。

担当の先生は毎日変わるので、PHS に電話をかけて連絡し、連絡がつかない場合は当日の朝に質問をしていました。

<内容、成果>

グローニンゲン大学での麻酔科クラークシップでは、4 週間の実習の中で 50 を超える症例での全身麻酔および局所麻酔の導入を見学させていただきました。医療現場における実践的な英語に壁があり、特にオランダ語しか話せない、またはオランダ語さえ話せない患者さんとのコミュニケーションに関しては満足いく実習ができませんでしたが、麻酔科の先生方を含む医療関係者のみなさんとはうまくコミュニケーションをとれたと思います。オランダ語を全く理解できないため、先生方が毎朝行われるカンファレンスには参加させ

ていただけず、麻酔の施行の検討のノウハウについては十分に学習できなかった部分もありますが、麻酔をかけるにあたっての患者さんの問題点とその生理学・病理学的側面から考察された案については施術当日の朝に先生に直接説明していただけたので、「あらかじめ検討された麻酔の実施」に関しては非常に実りある実習であったと思います。

私が医学科の 5 年次の学生であるという立場から実習という形で麻酔科の仕事に参加させていただけたこととしては、患者さんを準備室からオペ室に運び入れ、末梢静脈留置針を用いた静脈ルート確保を行い、モニターを装着し、マスク換気やラリングルチューブの挿入あるいは気管内チューブの挿管を含んだあらかじめ検討された麻酔の導入をおこない、患者さんに手術を施行するにあたり適切な環境を整え、種々の薬品や機械を用いて麻酔を維持し、術後には患者さんを覚醒させ、安全に術後のケアユニットまで送り届けることを体験しました。麻酔の導入・維持・覚醒に用いる薬品や機械は日本の麻酔科で勉強させていただいたものとあまり変わらず、一度見たことのある問題に際しては言葉の壁を感じることなく積極的に手を動かすことができました。小児の麻酔や緊急オペの麻酔に関してはモニターの装着程度しか実施できませんでしたが、術中に患者さんの麻酔が安定している間にはリアルタイムで先生に質問をすることができ、麻酔科に関する生理学・病理学・薬理学的な知識が幅広く身についたと思います。Supervisor の先生からは Good(五段階評価で上から二番目)との評価を得られ、実習はうまくこなせたと感じています。

また、病院や麻酔科の体制、先生方の生活に関する日本とオランダの間の違いも実感することができ、たいへん貴重な経験になりました。何より、一か月間、慣れない英語で生活をするという人生初の経験を通して、自分自身が社交的、積極的、外向的になれたという点が、この実習から得られた最大の収穫だと思います。